心肺蘇生法に神様は必要か？

『ガデスクリスタル』から迸る輝きに、ここにいたゼウス達は思わず目を瞑る。

　少しずつその光が和らいできた辺りでうっすらと目を開けると、その光はだんだんと人――いや、この場合は『神』か――の形になっていく。

　そして最後に一際大きく輝いてから、それは弾けた。

　そこに立っていたのは、ゼウスより少し背の低い少女。

　あどけなさの残る顔立ち。ゼウスが着ているものと似たような形の、ベージュ色を基調としたデザインのロングコート。そして、両手に一本ずつ握られた短剣。

　一見地味なそれらのアイテムを一瞥したその少女は、大きく息を吸い込み……

「よぅぉぉぉおっしゃぁぁぁあっ！　やぁっと外に出れたぁぁぁあっ！」

　おおよそ神の品格としてはどうなんだ、と思うような大声で吼えた。

　そんな彼女の胸に、小さな何かが飛び込んでくる。

「ヘルメス……様！　よくぞ……よくぞご無事でっ！」

「はっはっはっ！　ゴメンゴメン！　心配かけて悪かったね！」

　妖精モドキの背中を軽くポンポンと叩きながら、『ヘルメス』と呼ばれた彼女は豪快に、でも少しだけ申し訳なさそうに謝る。

　そして、ホッとした様子をしているもう一人の神に、顔を向けた。

「ゼウス様―！　助けてくれてありがとー！」

　そう叫んで手を振ると、ヘルメスは妖精モドキに少し離れているよう呟いてから、前に一歩踏み出す。短剣を手の上で回しながら、先程まで自分を持ち歩いているやつを睨んだ。

「さて、と。さっきまでよくも閉じ込めてくれたね……ぶっ飛ばされる覚悟は出来ているかなッ？」

「――ッ！」

　言うが早いか、ヘルメスは地面を蹴ってクレイオスとの距離を詰める。

　短剣を持っているので、接近戦に持ち込んでくることは分かっていた。

　長剣のリーチを考えると、ヘルメスをあまり近づけすぎるわけにはいかないことは十分理解していた。

　にもかかわらず、クレイオスはヘルメスの接近を許してしまう。

　クレイオスが距離をとろうとした瞬間を狙って、ヘルメスは短剣の一閃を放つ。

　そこから先は、妖精モドキや、先程まで戦っていたはずのゼウス、そして攻撃されているはずのクレイオスですら、思わず息をすることを忘れてしまうほどの連撃が始まった。

　最初の一閃にクレイオスが気をとられている内に、素早く死角に回り込み、見えないところから再び一閃。勘でその攻撃を剣で受けたクレイオスだったが、反対の腕で、隙間を打ち抜くようにヘルメスは突きを放つ。

　クレイオスはそれを仰け反って躱すものの、おろそかになった足に、ヘルメスは足を引っ掛けて強引に体勢を崩し、叩きつけるように上から切りつけた。

「がぁぁぁあっ！」

　今までの攻撃を何とかいなしてきたクレイオスも、これは直撃を免れなかった。そのまま地面に背中を打ち付ける。

　だが、叫び声をあげたのとは裏腹に、クレイオスの頭は冷静だ。

　地面に背中がつけば、ヘルメスの猛攻も僅かだが止むだろう。その隙を見て彼女の間合いから脱出し、距離をとればいい。そう考えていたのだ。

　だが、それは許されなかった。

　ヘルメスは、地面に叩きつけられた反動で僅かに背中が浮いたことによって出来た隙間に短剣の刃を差込み、強引に持ち上げてクレイオスの上体を起こす。

「何っ――？」

　そして、体をねじり、回転の勢いを利用して再び胴体を切りつけた。

「ぎぃっ――！」

　さらに反対の手に握られた短剣で、背中に一撃。

「くはっ――！」

　クレイオスの体が跳ね上がった瞬間、

「神の下に命じるよ。数多の力を刃に込めて、想いのままに放て！　！」

　ベージュ色に輝く二本の刃を、クロスさせるようにしてクレイオスの胴体に叩き込んだ。

「――っ！」

　クレイオスの口からは空気の漏れるようなくぐもった音が鳴り、地面に今度こそ完全に倒れる。衝撃と共に、クレイオスの倒れたところを中心に、クレーターが広がった。

　一見、一発しか入っていないような攻撃だが、ゼウスは知っている。

　刃が体に命中し始めてから、クレイオスの胴体が地面につくまでの間に、実は十から二十回程も斬りつけられている、ということを。一発一発は大したことはないが、それが何度も繰り返されることによって、最初の強めの一撃と合わせてとんでもない威力になるのだ。

「っし！」

　ヘルメスは小さくガッツポーズをとると、短剣をガンマンのごとく手のひらでくるくると回してから、鞘にしまう。

「いやー、すっきりしたー！」

　ヘルメスのそんな声を聞きながら、ゼウスと妖精モドキは倒れたクレイオスの方を見る。

すると――

少しばかり、クレイオスの指がピクンと動くのが視界に写った。

「ヘルメス様！」

「ヘルメス！　まだそいつ動ける！」

「……え？」

　さっきまでの晴れやかな表情が一転、唖然としたものになって、ヘルメスはさっきまでクレイオスのいたところを見ようと後ろを振り向く。

　が、その瞬間、ヘルメスは蹴り飛ばされていた。

「この……小娘がぁ……！」

　息は切れている。明らかに全力などとうてい出せない状態。

　それでも。

　クレイオスは、立ち上がっていた。